



2017年 新年挨拶

賢治のこだわり “行ッテ” と新医協

新医協会長 岩倉政城

脈診で手首を触れ、首を探ってリンパ節を触れ、指先でリズムカルに胸と背中を聴打診する医師の手は温かいものでした。胸に当てる前から聴診器を手で暖めながら症状を聴いてくれる心遣いは患者にとって百薬にもまさる効果がありました。病者の枕元に手洗い用の洗面器を置いて待っていると、膨らんだ黒かぼんを提げた医師が戸口に立ち、「いかがですか」と挨拶する声が、家族一同にどんなに大きな安堵をもたらしたことでしょう。

低診療報酬制度の下、保険医の採算バランスは患者数1日50人以上と、脅迫的な現場で日本の医師は診療に当たっています。その結果、ディスプレイを見ながらキーボードを叩き、冷たい聴診器を胸に当てる臨床は、肝心のものをバラバラと捨てていると言えるでしょう。

スーパーカブにまたがって一軒一軒を訪問し、便所の匂いから糖尿病を煩う家族があることを知って上がり込む自治体保健師が地域を守ってきました。それが国の方針で自治体は吸収合併され、地域に根ざしていた保健師たちが健康増進課の大部屋に集められ、机に座りっぱなしでキーボードを叩く時代になりました。住民を健診会場に来場させて効率よく”指導”に明け暮れると、受診者から「頭ごなしに注意されて落ち込んだ」など、健診を避ける保護者も出ています。それは医療・保健者の資質によって起こるのではなく、ぎりぎりの人員で業務をこなしていくことが迫られている現場では避けられない傾向です。

震災避難所でカウンセラーに胸の内を開かない人も、「足湯をしましょう」と、バケツ一杯のお湯を運んできたボランティアに、垢が浮いてくる足を洗ってもらいながらトットツと自分を語りはじめます。賢治は「東ニ病氣ノコドモアレバ行ッテ看病シテヤリ」から始まって「行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ」、「行ッテコハガラナクテモイ、トイヒ」と、自分の足を現場に運ぶことを願いました。

新医協は、水爆実験の灰をかぶった患者の元に足を運び、森永ヒ素ミルク事件では14年目の訪問を主導し、水俣に限定されていた水俣病有病調査を住民の要請に応じて不知火湾沿岸に拡げた一斉健診にも参加しました。久保新医協元会長は、生ワクチン導入を訴え歩き、ポリオにおびえるお母さんたちから帽子に入れてもらったカンパで食いつないで全国を行脚しました。今、福島・宮城の被災者に寄り添い現地訪問を重ねてきました。新医協に集う鍼灸師は、東洋医学の源流である触診（切経）を学び合い、福島では親と子のふれあい教室（ブラシタッチング）で、まさに触れ合ってきました。

平和憲法に背を向け海外派兵を進め、大企業を肥え太らせる為に核発電所の再稼働を強行し、海外に核発電所を売り込もうとする懲りない政権は、一方で医療・保健・福祉の圧縮に余念がありません。そのあおりで「来させる、キーボードを叩く」、に追いこまれた医療・保健・福祉を「行って、触れ合う」実践で立ち向かってきた新医協です。新年に臨み、新医協の誇り高い歩みに確信を持ちながら”ホメラレモセズ クニモサレズ”に地を這う活動に取り組みましょう。